

やまがら

少子化といわれて久しい。異次元の対策というけれど、何かが大きく変わる気配は感じられない。

第三次ベビーブームを起こさなかった団塊ジュニアたる筆者は、少子化の根源世代の一員だ。就職超氷河期といわれ、晩婚も非婚も普及。結婚しなかった友人、子供をもたなかった友人も少なくない。ただ、子供の頃からそんな未来がみえていたかという、そんなことはない。何となく、みんな大人になったら結婚して子供をもつものだと思っていた。でも、そんな「当たり前」に感じていた未来」が来た人と来なかった人がいた。そういう感覚だ。

一方、今の若い世代は、少し違うのかもしれない。「生涯、子供をもつ気はない」と明言する女性もいる。子供を産んだとしても、その子に明るい未来がみえないので産みたくないのだそう。深刻化する環境問題に、不穏な世界情勢。さらに日本はオワコンというムードもある。たしかに「明るい未来」が保障できるのか？と問われると、即答しがたい昨今である。

かつての「当たり前」は、意思をもって選択することへと変わったようだ。改めて「子供をもつべきか」と問われたら、どうだろう。縁があり子供を育てた筆者は、子供達と過ごした日々はこの上ない価値と感謝を感じているが、その価値を言葉や数値で説明するのは難しい。一方で、子育てに要する時間や労力は膨大で、費用もそこそこかかった。そんな負荷の数値の方は結構クリアである。コスパ、タイパ、みえる化の時代に、「分かりやすい魅力」を伝えにくい子育てに参戦するなんて、気乗りしないのかもしれない。

それにしても、未来って「みえているもの」なのだろうか。今ある状況が変わらないと考えているのか、何らかの将来予測を経て「明るくなるとは思えない」という結論に至ったのかは分からない。でも、人生序盤の若者が既に残りの人生に暗いイメージしかもてないのだとした

ら、それはなかなか辛い状況だろう。若者は「未来をつくる」機会と可能性に満ちている、自分の代で達成できなくても子の代、孫の代に引き継ぐ何かを残せるかもしれない、などと考えるのは、歳を重ねた者の理想論なのだろうか。

もし仮に、今「明るい未来がみえている」としても、それが本当にやってくるかは分からない。バブルに浮かれ、就活は接待付き。先輩達がみせていたそんな「楽しそうな未来」は、ほんの数年で超氷河期へと暗転する。下手に「明るい未来」図がみえていたというのも残酷だったと感じる。逆に、女性だからと嫌がられつつ就職した職場で、気づけば女性活躍がスローガンになっていたりする。「明るい未来」がみえ

ていなくても、それが来ないとは限らない。人生はギャンブルだ。

「みえていた明るい未来」が来なかったといえ、スギヤヒ

ノキの人工林もそうだろう。木材価格が高騰した1960年代、急な山のでっぺんまで一面にスギを植えた人々の期待と熱気はものすごかったのだろう。まさか収穫期には材価がさがり、世間からは花粉症の元だと責められ、子や孫に厄介がられる存在になろうとは、思ってもいなかったに違いない。当時、もし半世紀後の現実がみえていたとしたら、「明るい未来がみえないので植えません」と言われたのだろう。樹木という存在そのものも価値は変わっていても、市場での価値はダイナミックに変動し、人間は期待したり絶望したりと忙しい。

人生の1つ1つのステップにおいて、先を読み意識的に選択していくとは、何とも大変な時代である。選択肢があるというのはありがたいことのように、選択が溢れる時代に生きるのも容易ではなさそうだ。ただ目の前にある道を歩んで、ふと後ろを振り返ったときに幸せがみえる。そんな受け身な人生も魅力的に思えてくる。

(川下り型の団塊ジュニア)

明るい未来が みえないので